

日本キリスト教会 大阪北教会  
2018年4月1日(日)復活節礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ルカによる福音書24章36節～53節

36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのかどうして心に疑いを起こすのか。39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。42 そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、43 イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。44 イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそまだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」45 そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、46 言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。47 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、48 あなたがたはこれらのことの証人となる。49 わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」50 イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。51 そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。52 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、53 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

説教『復活されたイエス様と共に生きる』

◆この聖書に記されている事柄は、かつて起こった事実であり、そしてその事実の証しであります。と同時に将来起こることについての予言でもあります。しかし、文字通りの意味において、わたしたちは聖書に記されている事柄と同じ事実を体験することはできません。しかし、同じ事実を体験することができないとしても、それらと同質のことを経験することはできます。今日の聖書の44節において、イエス様はこう言っておられます。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである」と。『律法と預言者の書と詩編』とは『旧約聖書』の事であります。つまり、旧約聖書において証しされ予言されていた事が、主イエス様において実現し、それを弟子たちが経験したように、新約聖書において証しされ、予言されている事柄

を、やがて私たちも経験する事になるのであります。

◆今日の聖書において、復活された主イエス様は、弟子たちに現れ給うて、「あなたがたに平和があるように」と言われました。これまでに何度もお話しして来ましたが、「あなたがたに平和があるように」というのはユダヤ人の挨拶語「シャーローム」の意識であります。「シャーローム」は「平和」・「平安」の意味するヘブライ語です。因みに、昨年12月にトランプ米大統領が「エルサレムをイスラエルの首都と認定し、アメリカ大使館をエルサレムに移転する」と発言しましたが、「エルサレム」は「エル + サレム」で「基 + 平和(シャーローム)」、つまり「平和の基」の意味なのですが、このトランプ大統領の発言が新たな戦争の火種になっているのは皮肉なことです。その「シャーローム」をギリシャ語で意識したものが、「あなたがたに平和があるように」との挨拶語なのです。しかし、このいつもと変わらない日常の挨拶語が、ここでは格別の意味を持っています。この「シャーローム」は正に弟子たちの裏切りに対する赦しの御言葉になっているのです。

◆37節に「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った」ありますように、弟子達ははじめ恐れたのです。うろたえたのであります。「亡霊」は「怨霊」「幽霊」というところですね。しかしこれが弟子たちに対する復活の主イエス様の「顕現」であります。もしこの弟子たちへの復活の主イエス様の顕現、そして弟子たちの復活の主イエス様との出会いがなければ、キリスト教も新約聖書も存在しなかったと言っても過言ではないでしょう。そして、キリスト者としての私達の存在もなかったのです。そう思えば、私達一人一人の存在は実に無数の事柄、無数の出来事の積み重ねの上に成り立っています。どこまで遡れば私達は自分の始祖に辿り着く事ができるでしょうか。マタイによる福音書冒頭の系図はイスラエルの始祖アブラハムを始めとする系図ですが、「異邦人のための福音書」と言われるこのルカによる福音書は人間の起源を神様にまで遡っています。ですから当然の事ながら、軽い存在の人間は一人もいないのであります。先週も触れた事ですが、イザヤ書43章4節の「あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛する」との神様の御言葉の通りであります。

◆ところで、今日の説教の準備をする中で思い出したことがあります。苦小牧教会時代のことですから、もう30年以上も前のことになりますが、神学校の2年先輩の牧師が、ある時こんな話をされました。「僕の母親が、『イエス様が、眩しいばかりのお姿で夢に現れて下さったの』と、おかしな事を、夢みたいなのを言うんだよ！」と。しかし夢でもなんでも、わたしたちもイエス様の御姿をこの目で見たいものですね。わたしたちも直弟子たちと同様の経験、即ち、復活のイエス様との出会いを経験したいと思いませんか。復活されたイエス様との出会いの経験がないクリスチャンは、本物ではないのではないのか。何か、欠落したものがあるように思えて、当初、今日の聖書を読むうちに、辛くなるのを覚えました。しかし、読み進むうちに、導きを与えられて、元気を取り戻しました。

◆と申しますのは、イエス様の直弟子たちが経験できなかったことを、このわたした

ちが経験しているということに気が付いたからです。簡単に言いますと、直弟子たちは、イエス様の「十字架上の七言」を知らなかったのです。今日の聖書に記されている弟子達の復活の主イエス様との出会いのこの時点では、弟子達は未だ、「イエス様の「十字架上の七言」を知る事はなかったということです。しかし私たちは、百人隊長やこの新約聖書のお蔭で、「十字架上の七言」を知らされております。そして、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」との、主イエス様が犯罪人に仰った御言葉を、この自分にも語っていただいたものとして聞き、感謝し、十字架で死刑になった犯罪人と同じ喜びに与かっています。

◆ 私たちもこの実人生においてどのような悲惨と悲嘆、地獄を味わうかしれません。そして、死刑になっても当然という事を、しでかしかねない人間であります。しかし、ルカによる福音書23章42節の御言葉、「はっきり言うておくれが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」との御言葉を、この自分に語られた御言葉として聞くことを許されている私たちは、イエス様の直弟子たちの復活経験と同質の経験をしている、否、それを越える経験を死ちえいるとも言えます。勿論、恵みの経験を、自分が他よりも優れているかのように誇る者は、自分の何たるかを知らない愚か者なのですが。

◆ さて40節を見ますとこうあります。「こう言うて、イエスは手と足をお見せになった。」また、46節にこうあります。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する』」と。つまり、復活されたイエス様は、十字架に架けられ手と足に釘を打たれたイエス様と同じ御方であります。また、「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する」とありますが、それこそ、ここに並行法的表現を見ることができます。つまり、「苦しみを受け」られたイエス様と、「三日目に死者の中から復活」されたイエス様は、同一、同人格のイエス様であります。十字架のイエス様を真横に見るのと、復活のイエス様を真正面に見るのとは同質の経験です。

◆ 50節以下を見ますと、弟子達は昇天されるイエス様を伏し拝んでいます。弟子たちは、復活されたイエス様の顕現、その御姿に圧倒されていますから、イエス様と共に天に昇る「犯罪人」の姿は目に留まりません。イエス様と共に十字架に架けられた犯罪人が、昇天のイエス様と共にいるとは想像もできなかったのではないのでしょうか。しかしイエス様は、犯罪人に「はっきり言うておくれが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と約束されました。この「はっきり」という言葉は、「アーメン」です。確約です。ですから、昇天されるイエス様と共に犯罪人がおり、その後尾にこの私達もいるとは、それこそ夢にも思いません。犯罪人も私達も本当に小さい存在ですからイエス様の陰に隠されています。しかし、イエス様の約束は必ず果たされるのです。今、昇天する私たちの目からは、弟子たちの姿は下の方に見えます。段々、弟子たちの姿は小さくなって行きます。ですから、私達人間は、誰一人として、自分一人で何もかもを経験することはできません。それぞれが違う仕方で、しかし、同じ恵みによって、同じ救いに入れられているのです。いずれにせよ、わたしたち人間は神様に愛されているという経験と自覚において、イエス様によって罪赦された存在として全く

同格です。上も下も、前も後もありません。

◆ここに持ってきましたのは、私自身の葬儀の式次第と略歴です。2018年4月1日現在で書き直したものです。愛唱讃美歌3つです。120番と463番と108番です。463番の1節はこうです。「わが行く道 いついかに なるべきかは つゆ知らねど 主は御心なしたまわん 備えたもう 主の道を 踏みて行かん 一筋に」。今、自分の来し方を振り返る時、主が常にその善き御心を為して下さったことを感謝せずにはおられません。もし主の御愛に限りがあるのならば、私の「今・ここ」はありませんでした。しかしその御独り子をさえ惜しまずこの私の救いのために犠牲にすることを惜しまれなかった神様は、常に守り導いて下さるヤハウエ・イルエの神様であられました。必ず善き道を備えていて下さいます。私たちの主イエス・キリストにおける神様の愛から私たちを引き離し得るものはこの世に、この世界に何もありません。使徒パウロがロマ書で言う如くであります。式次第にある私の愛唱聖句はローマの信徒への手紙8章31～39節です。38節以下にこうあります。「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」正に、然り・アーメンであります。

◆47節と48節をご覧ください。「また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」と。私達も、罪の赦しの恵みの福音に身を浸し、感謝し、家族・友人・知人、あらゆる国の人々にこの恵みの福音を宣べ伝えようではありませんか。喜びをもって神様をほめたたえつつ、今日からの日々を、一日を一生のように、一生を一日のように、主の日の礼拝を、感謝をもって捧げ、文字通り天に召される日まで、感謝の歩み続けようではありませんか。

◆最後にヨハネによる福音書14章1節～3節を読みたいと思います。196頁です。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとの迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」わたしたちは常に、主イエス様と共にある事を許されているのです。

◆お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。あなたの限りなき御恵み、御愛を新たに覚え、心から感謝いたします。どうか私たち一人一人の今日からの歩みが、あなたの御恵みの証しの日々であらせてください。あなたの御栄光が現れる日々であらせてください。このあなたの教会を通して多くの人々が生けるあなたの恵みと御愛と救いに与れるように導いて下さい。この祈りイエス様の聖名を通し御前にお捧げ致します。アーメン。